

【死んだらどうなるのか】

早島鏡正

私の与えられました題は、「死んだらどうなるのか」ということですが、「どうなるか」「どうなるか」さっぱり私にも見当がつきません。見当のつかないことを自分なりに意味付け、納得をしていいものかどうか。このことを前提にお考えいただくならば、およそ仏教は、「よき人の仰せをことうむって信ずる外に別の子細なきなり」（『歎異抄』）とありますように、この「よき人」とは、浄土真宗の流れをくむ方々でいらっしやるならば、「よき人」とは遠く御本願を立てられた阿弥陀さまでありますし、その御本願を広くこの地上に具現されたお釈迦さまでもあります。また三国の七高僧の方々もそうですし、聖人のみ教えを信じて浄土に生まれられた我々の先祖の方々も「よき人」でございましょう。そういう「よき人」びとの言葉や生活を通して、「死んだらどうなるのか」ということを知らせていただく。すなわち、「死んだらどうなるのか」の道は二つに一つだ、ということを知らされるのであります。

二つに一つということとは、往生浄土であるか、さもなければ、地獄ないし餓鬼道に行くかであります。餓鬼道や地獄といいますが、併列的に人間世界と並んで地獄や餓鬼道があるというよりは、むしろ、人間世界の中に六道の姿がそのまま現れていると申してよいかも知れません。私にとつての存在の世界は、地獄であるか、極楽のお浄土であるか、その二つに一つであるということをまず思い起こしていただきたいのであります。

昨年、私共の東京大学仏教青年会は、北

海道に参りまして、函館、札幌、小樽と三カ所を巡って参りました。いずれも八月の丁度今頃、大変暑い最中で、夜このように公開講座を持たせていただきました。函館は曹洞宗の竜宝寺というお寺でした。翌朝、一行が食事をいただいておりましたとき、ご住職がお給仕をしながら、こういうお話を我々にして下さいました。

この間、函館市の精神病院から、患者さんが亡くなったのでお経を上げて欲しいと頼まれて、お経を上げに行きました。曹洞宗では水子経と言うのでしょいか、亡くなった人のために上げるお経があるんですが、そのお経を上げるときに、竜宝寺のご住職の眼前に、年のころ三〇歳くらいの男のうすくまった姿がぼおっと現れたというのです。それで、お経が終わりまして、看護婦さんの話を聞きましたら、なんでも二日前に精神病の患者が亡くなったそうです。その晩から午前二時になると必ず幽霊が現れ、それが二晩も続いたというのです。さすがの若い看護婦さんたちも宿直を嫌がりまして、お医者さんに「もう私達は宿直を致しません」と申し出ました。そこで、若いお医者さんが「あなた方は竜宝寺のお寺さんにお願いしてお経を上げてもらいなさい。私が今晚から宿直室に行つて、幽霊が出るか出ないか、この目で確かめてみる」とこういつてわかいお医者さんは三日目の晩、テープレコーダーと写真機を持って宿直室に入りました。なるほど、午前二時にドアをノックする音がする。そこでお医者さんはドアを蹴破つて、辺り構わず八、九枚写真を写しました。もちろんテープレコーダーのスイッチも入れました。お経を上げた竜宝寺のご住職さんは、

「どういふ人の姿が写っていましたか」と聞き、そして現像した写真を見せられて、びつくりしました。なるほど、読経中に眼前に浮び上がった男の姿と同じなんです。「はあ、この人でしたか」というものですから、お医者さんはびつくりしました。一方、テープレコーダーをひねって聞きましたら、「きゃあ」という声が聞こえる。竜宝寺さんが「この声は何ですか」と聞きますと、「いやあ、大変申し訳ありませんけれども、私がドアを開けたときの叫び声です」と若いお医者さんは答えました。

そういうわけで、とにかく幽霊を見た、とこういふんですけれども、私共は幽霊があるのか、ないのか、それを枯尾花と言ったらいいのか、その真偽の程はわかりません。それはさておいて、食事のときに、竜宝寺のご住職さんは、つぎのようにおっしゃいました。「私共、曹洞宗において、亡くなった人にお経を上げる意味は、“おまえはもう死んだんだ”、という意味でお経を上げるのです」「はあ、お葬式のお経というのはそういう意味ですか」と、了解したことであります。そういうわけで、私共、東京大学仏教青年会の若い諸君は、知識理論面では勉強しておりますが、生きた仏教生活というものに触れる機会がございませんので、そのような機会に巡り合うことは、ほんとうに有難いことです。この三〇歳ぐらいの患者さんがどうして亡くなったかと申しますと、なんでも急にお腹が痛くなった。そこで本人は、自分は精神病では死ぬだろうけれども、まさかお腹の病気で死ぬとは思っていない。そこで、「こんな病気で死にたくない、死にたくない」と願っていた。精神病院の看護婦さんやお

医者さんも「あんたは、こんなお腹の病気で死ぬはずがない。死ぬんじゃない、死ぬんじゃない」といって看病しました。だから、「死にたくない」、「死ぬんじゃない」というそういう二つの気持が、急死した患者の思いを形成し、その思いがこの世に残ったのです。幽霊になって出るといふかたちで。そういうふうに分けざるを得ません。

しかし、私の経験から申しますと、私の檀家で幽霊になって出てきた人を一遍も見たこともないし、聞いたこともないんです。少なくとも浄土真宗において、幽霊になつて出てきたなんていう御門徒は一人もありません。

これはどういふことを意味するのでしょうか。およそ宗教なり、仏教の目的は、何を説こうとしているのか。要するに、生きていく時に、何を解決することが最大の問題であるか。私の死後の問題を解決することがこの人間として生まれた生きがいであるはずだと、そういうところに仏教の目的があると思います。

先程来から、人間生きるということにおいて、究極の意味を見付けるべきである、とこういふ御話の趣旨であったようですが、もちろんその通りであります。

しかし、人間生活において、人間としての生を努力するということは、要するに、迷いの生存の中の努力に過ぎないのであります。我々が人間の迷いの生存に生まれてきたということは、次の迷いの生存を生むための努力をすべきではなくて、この命が終わったその時には、再び迷いの生存を持たない、という悟りの生存を得るための解決をしなければ、せつかく人間に生まれ

てきた意味はないわけでありませぬ。

親鸞聖人は『教行信証』の総序のなかで、こう申しています。「ああ弘誓の強縁は多生にも値い難く、真実の浄信は億劫にも獲難し、偶々行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」この文の心はといえば、長い長い迷いの生存を経巡つてきて、やっとこの人間世界に生まれた。何のために生まれたかという、再び迷いの生存を繰り返すために生まれたのではなくて、もう迷いの生存はこれで打ち切りである、打ち止めである。次の生存は、「往生浄土のおさとり身となって生まれる」そのことが、この人間世界に生まれてきた最大の目的でなければならぬのであります。

これまで多くの迷いの生存を経巡つてきたということをも「多生」という言葉で表しているのです。「多生」すなわち「多くの生まれ」というのは、多くの迷いの生まれということでありませぬ。また「往生」ということは、迷いの生存を取る再生・輪廻ではなく、さとり生まれということでありませぬ。

近ごろ、『教行信証』の英訳本を見まして、大変間違つた訳が使われているのを発見致しました。「往生」は普通、birth in the pure land あるいは、be born in the pure land とただ浄土に生まれる、と訳せばよいのです。浄土に生まれるというのは、おさとり身となつて生まれる。という意味であります。それなのに、rebirthとか、あるいは、reborn in the pure land というふうな、re(再び)という接頭辞をつけると、迷いの生存ということになるんです。つまり、お浄土は人間とか餓鬼道とか地獄の世界と同じように、迷いの生存だという

ことになってしまふんです。そうすると、せつかく昔から「往生は迷いの生まれをよめることでない」と言つてきた人々のご努力が水の泡になってしまひませぬ。せつかく外国に紹介する『教行信証』のみ教えが、お浄土は迷いの生存に生まれる」などというふうな外国人にうけ取られたら、大変な冒険になることでありませぬ。

私共は立派なインド思想、仏教思想を外国語に翻訳する場合に、余程心して翻訳致しませんと、外国人が浄土教を学んで地獄に行く、餓鬼道に行つた、ということになつて、これは大変なことになると思つて居る。

私共は幽霊のお話を通して、むしろ我々はこの迷いの生存に思いを残すような毎日毎日の生活をして居るのではないかと反省すべきであります。もしも思いを残すような、後の人に迷惑をかけるような、そういう生活をしていたならば、私自身も再び迷いの生存をとることになります。幽霊になつて出てきたら、それこそは迷惑です。「うちのおじいちゃん、おばあちゃんはお浄土に参つていらつしやるんだ」「その証拠にはちつとも幽霊になつて出てこない」ということではなければなりません。それこそがお念仏の人のすわりでありませぬ。

しかし、この頃の人間生活におきましては、生きるということも難しいけれども、死ぬということも非常に難しいのです。皆それぞれに苦労して、それぞれの死に方を考えていますね。ひどいのは安楽死という問題が今ヨーロッパにおいても、東洋においても問題になっております。

世の中が驚沢になつて参りますと、また、

人間関係が複雑になって参りますと、安楽死ということが正当化されて評価される時代になるわけです。ちょっと薬を一服盛って、苦しみのないような死に方をさせようと傍の者が思う。それはどうということかというのと、この頃は「癌だ、癌だ」と言っていて、お医者さんが一生懸命、最新薬を用い、あるいは、注射をする。そうするともう本来ならば、半年前に亡くなっているはずなのに、半年も一年も持ちこたえる。そんなことをしてまでも植物人間を生かす必要はない、などという意見も出てくるのであります。

ですから、この安楽死ということは自然死ではないのです。せっかく家族の人々の手厚い看病を受けて亡くなるということも、これは私の努力だけじゃないんです。人間の死に関しましては、ひとえに肉体的条件のよるところでありまして、早く命を終わろうとか、遅く命を終わろうとか、そういうことは私の力の及ぶところではないわけであります。

お家の人々が、この世に生まれて互いに親となり、子となり、兄弟となった幸せを最後まで手を握ってお浄土への旅立ちの出来るといふ死に方において得させていただくことが、家族という尊いご縁に恵まれた人間の姿であると思うのです。

どのように長い療養生活を送り、家族に迷惑をかけても、死んだその時にお念仏によつてお浄土に参らせていただく身であるかどうか、これが最も願うべき真の死に方であり、真の生き方だと思えます。肉体の死を機縁として、往生浄土の仏さまの身として生まれさせていただく。永遠の生の誕生する機縁が私のつたない肉体の死であ

る、ということでありませう。

この間、岐阜県に参りまして、お寺さんたちの研修会に出席しました。その時、あるお寺さんが幼稚園を経営していらつしやうと、園児さんの話をつぎのようになさいました。

数日前、私の幼稚園で飼っている小鳥が死にました。そこで一人の先生が園児さんに相談せずに、校舎の片すみに土を掘って軽く埋めたのです。そこで、姿の見えなくなつた小鳥を探していた園児たちが「先生、小鳥ちゃんはどこに行ったの」「小鳥ちゃんね、天国へ行ったのよ。それであそこに埋めたのよ」とこつこつたんです。「ほんとに先生、天国に行ったの」と聞くので、「そつよ」とくりかえす。先生は「天国へ行ったのよ」と言いながら「埋めた」と言うので、園児さんたちは不思議でならなかつた。そこで園児さんの一人が翌朝お父さんを連れて来て、お父さんに手伝ってもらつて一生懸命、小鳥を埋めた所を掘りかえました。園児さんはお父さんの掘り起こした小鳥の死骸を見付けるやいなや、先生のところへ飛んでいって、「先生、やつぱり小鳥ちゃんは天国へ行っていないわね」と言いました。

この話を園長さんが私に申しまして、「早島先生、このことを先生はどう思いますか」「さあね、わたしは思うに、その園児さんは余程偉いですね」「どうしてですか」「いや、それはもうこの頃の大人の人以上りです、その園児さんのほうが偉い。何故ならば、死んだらどうなるかということとを園児さんは園児さんなりに考えているわけでしょう。天国へ行った、と言うから、天国はどこだろうと考える、ところが

一方、小鳥は埋められているんですね。だから天国に行っているはずはない。それで翌朝パパを連れて、もう一遍掘り起こして確かめたら天国には行っていない。その園児さんの“死んだらどうなるか”、という批判的確認の態度というものは、われわれ大人も見習うべきでしょうね”。

何のためにお寺に参ってみ教えを聞いているのか。あるいは、お寺に参らないでも、仏法があるのに、また親鸞聖人のみ教えがあるのに耳を貸そうともしない日暮しをしている大人たちの姿。こうしたこと反省致しますときに、本当に生きて元気に働いている時にこそ、私の“死んだらどうなるか”という問題を、とことんまで解決をさせてもらうということが、人生の生きがいであろうと思うのです。

もう一〇年近くになりましたよ。東京大学の宗教学の主任教授でいらっしやいました岸本英夫先生が、毎年毎年、頸の癌の発生で手術をなさった。そして、とうとうお亡くなりになりました。東大の図書館で慰霊祭がございましたが、その時に、「わが生死観」という、ある雑誌に掲載しました先生の絶筆を、列席者に記念品として配られました。

その文章を拝見致しますと、岸本先生はアメリカの大学に講義に行っていたらしやる時に、この癌の発生を知らされたわけでございます。そして、その時、目の前が真っ暗になったと言われるんです。しかし、自分の仕事があるということと、今度はやがてガンのために死ぬかもしれないという死の恐れのため、自分なりに努力をしていかれたそうであります。これはインテリの最も典型的な生き方であると

申せましょう。

お釈迦さまの仏教におきまして、死は恐ろしくないんです。死の恐れが怖いんです。「死の恐怖が恐ろしい」と説いております。

岸本先生はこの死の恐れをどう克服するか、自分なりに真剣に考えられました。御自身は神道、仏教、キリスト教、回教と世界のあらゆる宗教を学問的対象として研究していらっしやいますから、特定の宗教によって自分が安心立命をするということになると、まあ、自分の良心が許さなことです。父上様はユニテリアンのキリスト教の牧師さんですけれども、先生はキリスト教にも、仏教にも、神道にも、既成宗教の如何なるものにも耳を貸さないで、自分なりに“死”の解決をしよう、つまり死の恐怖を克服しようとなさいました。

私共はしばしば、東京に行くとか、京都に旅行に行くというふうには、二、三日家を明ける段になりますと、周辺の机の上を若干きれいに整理するでしょう。それと同じように、もうまもなく私の死の旅路がやって来るのだから、そのために、周辺の整理を少しづつしていくことが、死の恐怖を克服していく道になろうというので、岸本先生はお墓も作り、それから、いろいろ遺産のことも、あるいは、子どもたちの将来のことも少しづつ解決をしていく、整理をしていく、このような努力をしていく中で癌の恐怖というものを振り払っていった、ということが書いてありました。

そして、最後に、特定の如何なる教えにもよらず私は死んでいくと。死んだ後は何も残らないと。死後は何も残らないから生きているこの短い人生を一瞬一

瞬、有意義に送るべきであると、その決意を表明しております。これが、岸本先生の死に対する解決であると同時に、最も典型的な現代人の死に対する解決の方法だと思えます。

“死後は何もないんだ”という考えにたいして、親鸞聖人の浄土教は、死後の世界の実在をはつきり認めております。先程申しましたように、おさとの世界に生まれるか、地獄に行くか、二つに一つであります。迷いの生存を再び繰り返すか、もうこの世限りで迷いの生存を繰り返さないという身となるかのいずれかでございます。

この間、中外日報という仏教系の新聞に佐賀県の県立東高校の先生をしている貞包という社会科の先生が、こういう論説を發表していらつしゃいました。先生は本願寺派のお寺の御住職でもありますが、多年、社会科の教育に携わっておられますので、その成果を發表しているのであります。新聞の題は「禅と浄土と高校生」という題で五回ほど連載されておりました。

ところで、貞包先生の結論によりますと、生徒の七割ぐらいは仏教徒の家庭である。しかし、その七割の生徒の内の半分ぐらいはまあ仏教の話をして、ある程度知識としては理解出来るけれども、本当に理解していないという。そして、今の高校生は学校の教科書の中で、道元禅師なり親鸞聖人の思想なりを学んでも、本当はわかっていないという。これは実際にアンケートを取ってみるとわかる、というのです。どうして今の高校生が仏教に対する理解がないのか、というその理由を二つ挙げております。

第一は、「お蔭さま」というものの考え

方が無いというのです。なぜかというところ、ヨーロッパの自己中心のものの考え方で育てられているから、仏教の縁起依他の精神 くだいていえば「お蔭さま」という考え方が全く無い。

第二は、仏智の前に照らされている自己、「仏さまに守られている私」という自覚が欠けている。これら二つの欠如のために、仏教のみ教えを聞いてもチンプンカンプンでわからないというのです。

この二つは、今の現代人の特徴をそのまま浮き彫りしているものと思われれます。どうして仏さまのみ教えがわれわれにわからないのか。幼時からヨーロッパのもの考え方で教育されてきているから、「お蔭さま」というものの考え方が無い。“み仏さまに守られている”という自覚がない。だから、どんなに道元さんの坐禅のお話を聞いても、『歎異抄』の言葉を拝聴してもチンプンカンプンである。それに比べるとお互い小さい時からみ教えを聞かされている者としては、なんとなしに「お蔭さま” “み仏に守られている”ということが毛穴の中に染み込んでおりますから、「法蔵菩薩因位時」と難しい漢文の正信偈であっても、御本願のお心がすうつと私に伝わる。これは長い長いお育てなんです。このように思いを致してくると、人間に生まれて、徒や疎かで長生きをしたのではなかった、一声でもお念仏を称えさせようとの大悲の恵みではなかったかと、このように喜ばせていただきたいものであります。

白杵市・善法寺会場にて 東大教授・文博